

## 授業の理念と目標を可視化すること

—中上級日本語コース開発プロセスの記述・分析から—

武一美・小高葉子

### 要旨

本稿では、教科書を使った中上級日本語クラスの3学期間にわたるコースデザインの更新を記述・分析・考察した。その結果、「言語知識の獲得」「言語活動の実現」「学習方法の獲得」というコースの目標と、学習者を自立した言語使用へ向かわせるという理念がトップダウンとボトムアップの双方から立ちあがってきたことが確認された。以上のことから、様々な教育観・実践観を抱く教室担当者が関わる場合であっても、議論や更新を通してボトムアップで共通の理念を持ち得ることが示唆された。

### キーワード

授業の目標、理念、ボトムアップ、可視化、コーディネーター

### 1. はじめに

筆者らは大学の留学生センターにおいて、2008年度秋学期から2009年度にかけ、中上級教科書型総合日本語コースの開発・コーディネートを担当した。大学では、日本語レベルを初級（1レベル）から超上級（8レベル）までの八つのレベルに分けており、その中で、2008年秋学期より、教科書を用いた総合日本語コースが初級1レベルから6レベル（上級）まで設置された。筆者らが担当したのは、そのうちの5レベル（以下中級）と6レベル（以下上級）<sup>(1)</sup>であった。

並行して同一授業を行う多数のクラス担当者や学習者への説明のために、筆者らは、クラスで行う活動とその目標を何度も付き合わせ齟齬がないか検討・明確化・言語化を繰り返した。そして徐々に、「言語知識の獲得」「言語活動の実現」「学習方法の獲得」という目標項目とそれに対応する活動が、筆者らの中で明確に言語化できるようになり、同時に、学習者を自立した言語使用へと向かわせるという理念も立ち上がってきた。

本稿では、最終的なコースデザインに至るまでのプロセスを記述・分析し、筆者らがそのプロセスを通して体験したこと・考えたことを報告する。

### 2. コース開発と更新のプロセス

#### 2.1 記述・分析の手順と方法

3学期間のコース開発と授業実践のプロセスで産出された資料を収集し、次の手順で整理・二次資料を作成し、その記述・分析を行った。1) シラバス・授業予定表をもとに、各学期の授業内容を表にし、2) 各クラス担当者が作成した学期末の授業報告シートから、コース改善の資料として筆者らが注目した内容を取り出し表にして、3) 改善にあたり筆者らが考えていたことを記述し、4) 1) 2) 3) の関わりを分析した。

## 2.2 コースの概要

コースの対象者は、学部にて4年間在籍する学部留学生と、留学センターにて1年間在籍する語学留学生である。授業数は週3コマ（1コマ90分）×15週の計45コマ、クラス数は2009年秋学期時点で12クラス（中級7クラス、上級5クラス）あり、複数のクラスが同時進行する。クラス担当者数は、全体で約20名、1クラス二人の担当者が担当する。

本稿の分析対象とするのは、2008年秋学期～2009年秋学期の3学期間である。スリーエーネットワーク出版の『留学生のための時代を読み解く上級日本語』（以下、教科書）を用い、中級は教科書前半（3・7・9・11・12・13課）、上級は教科書後半（14・15・19・20・24課）を学習した。教科書本文の読解のあと、本文に関連するテーマでレポートを書き、学習者同士で読み合うライティング活動を行う形で進めた。それに加えて上級では、「選択課題」（授業で扱わなかった課を各自の興味関心に従い選択し、自分で読解し発表・レポート執筆を行う）の活動も入れ、学習者が最終的に教科書全課に目を通す仕組みを作った。なお、本稿の「教材」はコースで用いる補助プリント・シート類を指す。

## 2.3 コース開始時のコースデザイン・シラバス

コース設置当初、筆者らの所属機関では、「(教科書を使って) 四技能を繰り返し使い、コミュニケーション能力を養う」ことが初級から上級までの(教科書を使用する)コース全体の大目標であった。そこで、「読む」教材としての教科書に、文型・漢字・語句説明の補助教材を加え、「書く」「話す」「聞く」ためのライティング活動をコースに入れた。

表1 2008年秋学期コースデザイン

内容	読解活動	中級 上級	①テキストの該当課に出てくる語句や文法を勉強する。 ②本文を読んで理解する。
	ライティング活動 (以下 ラ活動)	中級	①本文の内容と関連するテーマについてクラスメイトと討論する。 ②①の活動を踏まえながら、自分でテーマを決めレポートを書く。 ③レポートの形式・内容について学習者がお互いにコメントする。 ④レポートの評価基準を決め、他者評価と自己評価をする。
		上級	中級①-④の内容+⑤選択課題（教科書の未習の課から学生が1課を選び、自分で本文を読んで発表し、レポートを執筆する）
教材	読解活動	中級 上級	①教科書 ②漢字練習シート ③文型語句説明シート ④文型語句練習問題シート
	ラ活動	中級 上級	①レポートメモワークシート ②レポートコメントシート ③レポート評価表
評価方法		中級	レポート 25% 発表・ディスカッション 10%
		上級	レポート 20% 発表・ディスカッション 15%
			出席 20% 小テスト 15% まとめテスト 15% 自己評価表・他者評価表 15%
進度		中級 上級	各課につき、読解3コマ・ライティング活動3コマ +選択課題12コマ（上級のみ）

本コースがスタートした2008年秋学期は、授業担当者から学期終了後多数の意見が寄せられた。表2は、学期末の「授業報告シート」コメント欄に書かれた問題点である。

表2 2008年秋学期各クラス担当者が指摘した問題点(クラスごとに整理したもの・順不同)

	読解活動	ライティング活動
中級	A 今後は漢字の不得意な学習者や語彙の少ない学習者(主に欧米系)の支援方法を考えるべきである。	とくに言及なし
	B 文法等の指導項目が非常に多く一通りこなすのが精一杯でどれも中途半端になってしまった感がある。	成績の15%を占める最終レポートの評価表を一日で書かせることになり無理があった。レポートのテーマにより書きにくそうなものもあった。
	C 非漢字圏の学習者は教科書の読解に苦勞する場面が多かった。	始めからある程度の書き方のルールを定めそれに従ってレポート活動を行うことが効果的ではないだろうか。
	D 今後は読解を今よりもう少しゆっくりにし重要な文型や語句を定着させる工夫が必要。	評価し合うことで文章が整理され読みやすいレポートが書けたが、学習者から「わかるよう、文型や語彙のレベルを下げたので、レベルが上がったとは思えない」とのコメントがあった。
	E 文法等の指導項目が非常に多く一通りこなすのが精一杯でどれも中途半端になってしまった感がある。	読み合わせや評価表の活動にあまり価値を感じていないような学習者も目立った。学習者のニーズと授業内容にずれがあったようである。
	F 文法や語彙に関しては、もう少し時間をかける必要があるのではないかと思われる。	(学習者の要望で)当初よりクラス担当者の介入を増やしレポートの添削などを行った。レポートは(中略)ある程度模範となるものを示して、それに近づけていくようなやり方のほうがいい。
上級	G 文法力・語彙力・読解力ともに強くはないため、途中で進度をゆっくりにし、文法・語彙・読解に時間をかけたら学習者の反応はよかった。	(学習者の要望で)当初よりクラス担当者の介入を増やし、レポートの添削などを行った。
	H 漢字に弱い学習者への補助及び余裕ある時間設定が必要。	ライティング活動のテーマ設定と書き方に関して育成する日本語能力の設定が必要。
	I 要旨を把握することはできるが、細部の意味については理解が難しいこともある。	レポートそのものの構成知識等は意見を読み手に伝える上で重要なものである。このような基礎的な知識はレポートを書く上でなぜ必要なのか再度学習者に認識させる必要もあるだろう。

授業担当者が挙げた問題点を参考に、2009年春学期に向けて、筆者らはコースデザインの更新を進めた。表2で挙げた問題点のなかでも、特に網掛けをしたコメントはコースデザイン更新の指針<sup>(2)</sup>となったものである。「漢字や語句に弱い学習者を補助する工夫が必要」という複数の意見から、教科書に出てくる文型・語句・漢字などを説明する教材を作成し学習者に提示するだけでは不十分で、それらを言語知識として定着させるためには何らかのスキマホールディングが必要であったことがわかる。また、「指導項目が多すぎてどれも中途半端」からは、学習項目について重要文型・重要語句(読解活動やライティング活動でよく使われるもの)とその他の項目に緩急をつけて扱えるよう、ある程度の指針を作ることの必要性がわかった。また、レポートなどの授業活動で育成する力についても「レポート活動のテーマ設定と書き方に関して、レポート活動で育成する日本

語能力の設定が必要」「読み合わせや評価表の活動にあまり価値を感じていないような学習者も目立った」などのコメントから、コーディネーター・クラス担当者・学習者の三者間で、このコースにおける「読解」「レポート」「話し合い」などの活動の目標と最終的な方向性のイメージを共有することの重要性が浮き彫りになった。この段階で筆者らは、「コースの目標・方向性の可視化」を意識し始め、同時に、コースの目標や方向性と具体的な学習項目・スケジュール・教材の個々の目的に関する検討・議論を行うようになった。

次節以降では、更新作業の中で整備されていった各教材・授業活動の内容・使用目的・方法を概観し、コースがどのような目標と方向性を意識し作られていったのかを見ていく。

## 2.4 2009年春学期における教材・使用方法・目的の改善

コースデザインの問題点や方向性の可視化の重要性は見えてきたが、2009年春学期の改善・更新作業は、個々の教材の内容の整備、使用方法・目的の明確化にとどまった。

表3 2009年春学期の使用教材の使用目的・内容・使用方法

教材名	使用場面	使用目的	内容と使用方法
予習語句シート	予習授業	長い文章を読むための語句の類推や調べ方を学ぶ。	教科書本文の語句をコロケーション単位で抜き出しリスト化した。予習したこと・授業で確認したことが書き込めるよう各項目には自由に書き込めるメモ欄を付けた。授業では、予習でわからなかった部分を質問するよう指示した。
文型語句説明シート	予習授業	長い文章を読むための文型の調べ方・理解の仕方を学ぶ。	教科書本文の重要文型の意味・活用・例文を提示した。学習者の辞典利用への橋渡しの意図から各種の「文型辞典」の形式を参考にした。授業では、予習でわからなかった部分を質問するよう指示した。
短文作成シート	授業	表現意図と表現形式のすり合わせを、クラス担当者からの添削とコメントから学習する。	重要文型の中からとくに産出まで求める文型を選び、短文作成練習を行う。授業内でクラス担当者は文型について詳しく説明し、学習者が作成した短文を添削し運用に結びつける。
文型語句練習問題シート	復習	復習する。	語句・文型の練習問題（短文作成以外）。テスト準備として自習する。授業時間内に特に時間は設けないが、わからない部分があれば、適宜授業中・授業後に質問する。

2009年度春学期から、「予習語句シート」を新たに用意し、毎回の授業の始めにそれをもとにした小テストを行って語彙・漢字の定着を図るようにした。「予習語句シート」は、予習（辞書で調べる）がしやすいよう語句を読みがな付きの辞書形で提示し、メモ欄を付けた。また、重要文型とそうでないものに緩急をつけて授業で扱えるよう、「文型語句説明シート」の中から重要文型を選び、短文作成練習を行う「短文作成シート」も導入した。そして、小テストと「短文作成シート」は、各課最後の「まとめテスト」にも反映させた。

以上のように、2008年秋学期から2009年春学期にかけ使用教材を大きく改訂したことにより、[予習→授業→復習→テスト]の流れと内容が明確になり授業で扱う項目が精査された。一方で、予習や復習を学習者に促し、「授業は自分が予習した内容を確認する場所」と強調した結果、2009年春学期コース終了後にクラス担当者・学習者双方から「多

くの教材を渡されても、予習の仕方がわからない」「読解・レポートの目標が曖昧」といった声が出た。使用教材が整備され、教材の内容・使用方法・目的が明確化されたものの、授業活動や教材の使用方法に関してクラス担当者と学習者に戸惑いが見られた。こうした問題は、[コースの理念・目標・授業内容]三者の関係が、十分に明確化・言語化がされていないことに起因するのではないかと筆者らは考えた。この段階に至ってようやく筆者らは、コースの目標や方向性と具体的な学習項目・スケジュール・教材の齟齬について、議論を行うようになり、コースデザインをボトムアップで改善するという視点が生まれた。

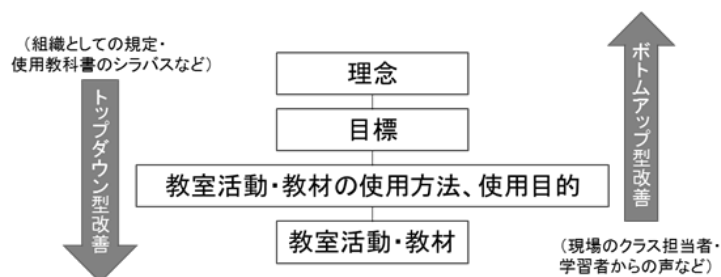


図1 コースデザインにおけるトップダウン型とボトムアップ型改善のモデル

ボトムアップ型改善とは、図1のように、教室活動の現場からの声を踏まえ、既存の活動と教材の使用方法・目的を見つめ直し、それらをどのような目標のもとに使用するか、その目標をなぜ目指すのか、さらに目標のさきにある理念まで再考し、コースデザインを調整・改善することをいう。トップダウン型は、理念や目標から教室活動を考えることであり、教育機関内の教育理念、使用教科書のシラバスデザインなどから始まる場合もある。

## 2.5 2009年秋学期におけるコースデザインの変化

### 2.5.1 コースデザインの変化と明確化された三つのコース目標

2009年春学期の振り返りから、筆者らは、2009年秋学期開始前に[コースの理念・目標・授業内容]の整合性を検討し、クラス担当者と学習者に向けてその可視化を試みた。

表4 2009年秋学期コースデザイン

オリエンテーション	新学期の最初の授業で「学習方法オリエンテーション」「語句の勉強方法ワークショップ」を行い、授業の予習・復習、とくに語句・文型の勉強の方法についてガイダンスする。		
内容	読解活動 + ライティング活動 (詳細は本稿 2.3 表1 参照)		
教材	読解活動	中級 上級	①表現文型シート ②予習語句シート…漢字シートを兼ねる ③短文作成シート…文型から短文産出 ④表現文型練習シート
	ラ活動	中級 上級	①レポートメモワークシート ②レポートコメントシート ①レポートメモワークシート ②レポートコメントシート ③レポート評価表 ④レポート作成の指針
評価方法	中級	話し合い 20% レポート 20%	出席・授業態度 20% 小テスト 20% まとめテスト 20%
	上級	ディスカッション 15% レポート 25%	
進度	中級	各課につき読解 5~6 コマ・ライティング活動 1~3 コマ	
	上級	各課につき読解 5 コマ・ライティング活動 1~2 コマ、選択課題 12 コマ	

表4は、学期毎の改訂を経た最終的なコースデザイン・シラバスと教材である。大きな変更は、前学期のコメント「多くの教材を渡されても、予習の仕方がわからない」を踏まえ、「学習方法オリエンテーション」(表4網掛け)を授業活動として位置付けた点である。

このように、本コースは2008年秋学期から2009年秋学期にかけて更新を重ね、以下に示す「言語知識の獲得」「言語活動の実現」「学習方法の獲得」を目標としたコースへと整備された。規定された三つの目標と、それぞれの教室活動との整合性を以下に示す。

- 言語知識の獲得…文型・語句・漢字などの言語要素の意味や用法に関する知識の獲得
- 言語活動の実現…言語知識を実際の場面で活用すること(読解、レポート作成、レポートにおける言語知識の獲得や内容の自己修正)
- 学習方法の獲得…言語知識を得る方法(多様なリソース、例文・教科書本文・クラスメイトのレポートから個々の文型・語句等の意味や用法を類推し言語知識とする方法)

三つの目標は次のプロセスで整理・明確化された。

まず、教材(表現文型シート・予習語句シート)の使用実態と目的から、文法・語彙の学習を「言語知識の獲得」と規定した。また、読解・レポート作成・レポートの自己修正などの授業活動の目的を考えた結果、「言語活動の実現」という目標が立ち上がった。つまり、「言語知識の獲得」と「言語活動の実現」は、授業実践が実施されたあと、その授業実践をなぜ、何のために行うのかを考え言語化した結果、得られた目標であった。

そして、「言語知識の獲得」「言語活動の実現」はどこへ向かうのかを考えると、そのさきには「自立した言語使用」という大きな理念が浮かび上がった。「自立した言語使用」とは、次節で詳しく述べるが、学習者が教師から自立して主体的に日本語を使うことであり、教室を含む周囲の多様なリソースを用いつつ、言語を主体的に使用することである。そして、「言語知識の獲得」「言語活動の実現」と「自立した言語使用」を結ぶためには「学習方法の獲得」が必要であると考えた。

つまり、いわば現場からボトムアップで立ち上がった「言語知識の獲得」「言語活動の実現」という目標に対して、「学習方法の獲得」はボトムアップで生まれた問題意識をきっかけに、トップダウンで生まれたものであった。

このようにコースデザインの更新作業は、ボトムアップとトップダウンの双方向からの目標の見直しとそのさきにあるもの、そしてさらなる教材や教室活動の改訂へと向かった。

## 2.5.2 三つのコース目標と各教室活動の関係

表5は、2009年秋学期の教室活動の詳細である。コース目標を「言語知識の獲得」「言語活動の実現」「学習方法の獲得」と整理し、そのさきにある理念に着目したことにより、各活動と目標の関係が明確になり、活動間の整合性や連携もわかりやすくなった。中でも、「学習方法の獲得」は本コース開始時には意識されなかった項目である。この段階で筆者らは、どのような目標を持って教室活動を行い教材を使用するのかを明確化し、教室外で行う予習・復習も含めたコースデザインの整備を実行した。

表5 2009年秋学期の教室活動の内容と目的

活動	レベル	内容・目的 ( [ ] は結びつくコース目標)
読解活動	中級 上級	<p><b>【内容】</b></p> <p>① 教科書該当課の語句・文法を勉強する。文法・語句…クラス担当者の説明を待つのではなく、予習を前提に進め、わからない部分を授業で聞くことを学習者に強調する。クラス担当者は、文型・語句の学習方法について言及することを徹底する。学期の初めに、「学習方法オリエンテーション」「語句の勉強方法ワークショップ」を行う。</p> <p>② 本文を読んで理解する。</p> <p><b>【目的】</b></p> <p>① 語句・文法の知識 = <b>言語知識の獲得</b> 語句・文型を類推する、調べ方・理解の仕方を身につける。 = <b>学習方法の獲得</b></p> <p>② 読解中級…本文の大意取りを目的とする。 = <b>言語活動の実現</b> 上級…筆者の文章の構成の仕方、論の進め方、時代の読み解き方、文脈の中で語句や文型がどのように使用されているのかを学ぶ。 = <b>言語活動の実現、学習方法の獲得</b></p>
	中級	<p><b>【内容】</b></p> <p>① 本文の内容と関連があるテーマについてクラスメイトと討論する。</p> <p>② ①の活動を踏まえながら、自分でテーマを決めてレポートを書く。</p> <p>③ 書いたレポートの形式や内容について学習者同士コメントする。</p> <p><b>【目的】</b></p> <p>① 指定された文字数程度で、適切に説明し、感想や意見を加えてわかりやすい文を書く。 = <b>言語活動の実現</b></p> <p>② 相互自己修正・推敲・評価とクラス担当者による添削を踏まえて書き直しを行い、よりよいレポートをめざす。 = <b>言語活動の実現、学習方法の獲得</b></p>
ライティング活動	上級	<p><b>【内容】</b></p> <p>中級の内容の①②③+「選択課題」…未習の課から1課を選び自分で本文を読んで発表しレポートを作成する+最終レポートの評価項目(「いいレポート」の評価項目)を決め、他者評価・自己評価する。</p> <p><b>【目的】</b></p> <p>① 教科書本文筆者の意見に、自分の意見を展開する。 = <b>言語活動の実現</b></p> <p>② 読み手に、伝わりやすい語句・文型・論理的構造を意識する。自分の文章を客観的に見直す。 = <b>言語活動の実現、学習方法の獲得</b></p> <p>③ テキストから課題を選択し(問題発見)、筆者の意見を読み取り(他者理解)、自分の意見をレポートとして書く(自己理解) = <b>言語活動の実現、学習方法の獲得</b></p> <p>④ 「いいレポート」の評価項目を意識する。 = <b>言語活動の実現、学習方法の獲得</b></p> <p>⑤ 上記評価項目に沿い、レポートに対する相互評価を行い、最終的にレポート及びクラス活動全般に対して自己評価する = <b>言語活動の実現、学習方法の獲得</b></p>

まず教科書本文の読解は、予習で「学習方法」を駆使して獲得した「言語知識」を用い「読む」という「言語活動を実現」し、復習でそれらを再確認し「言語知識」の定着(=獲得)を図る流れとした。そして読解によって「獲得」された「言語知識」は、レポート執筆という「言語活動を実現」した。またレポートを学習者同士で語句・文法・内容を吟

味し修正し合う「相互自己修正」は「読み合い、話し合い、互いに修正する」という複雑で自然な「言語活動を実現」する機会となった。この過程でさらに「言語知識が獲得」され、「他者と協働して読み合い、修正する」という「学習方法の獲得」にもつながった。

コース履修期間中、これらの活動を繰り返すことによって、学習者は「言語知識の獲得」「言語活動の実現」「学習方法の獲得」の経験を重ねる。そして、上級の最後の「選択課題」の活動において、獲得した言語知識と学習方法を最大限に活用しながら課題を選択し、本文を読み、発表する。さらに、自分の意見と発表で受けたコメントを再構成しレポートを書く。こうした「読む」「発表する」「書く」という言語活動の過程で、辞書など各種リソースで言葉を探しながらさらに新しい言語知識や学習方法も獲得する。つまり、「選択課題」に取り組むことは、コースの中で積み重ねてきた「言語知識の獲得」「言語活動の実現」「学習方法の獲得」で身につけた力を発揮する機会であると同時に、さらにそのさきにあるコース理念「自立した言語使用」を実現することにつながる。

2010年より、「言語知識の獲得」「言語活動の実現」「学習方法の獲得」を目標に、活動内容と教材の配置や使用方法を明確にし、クラス担当者や学習者と共有した。コーディネーターによるクラス担当者への授業前オリエンテーションや、学期中のクラス担当者からコーディネーターへの相談の際、この指針のもとに一貫性を持って対応した。その結果、2008年のコース開発当初に比べ、クラス担当者の戸惑いの声は明らかに少なくなった。

### 3. まとめと考察

以上、筆者らがコース開発を担当した中上級日本語コースのコースデザインの改善・更新の過程を3学期間にわたり記述し、最終的な本コースの理念・目標と具体的な活動内容に至るプロセスとその関係を分析した。図2では、その過程で明らかになった三つのコース目標が本コースの中でどのように関連しているのかを改めて示す。

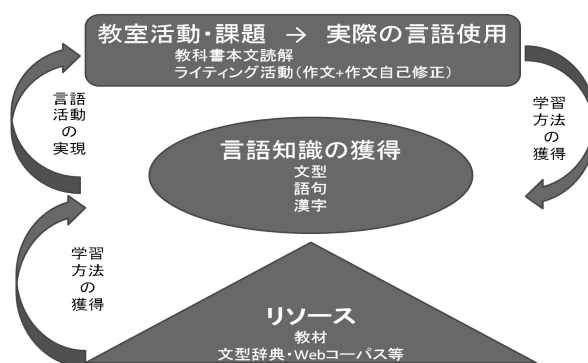


図2 3つのコース目標の関連

すでに述べたように、授業内容とその目標を見直すプロセスで、三つのコース目標「言語知識の獲得」「言語活動の実現」「学習方法の獲得」が明らかになり、さらに、そのさきにある理念を見つめることで言語化されたものが「自立した言語使用」であった。もっとも、「自立した言語使用」という理念は、コース開発・更新の過程で突然出てきたわけではない。所属機関の教科書型総合日本語クラスでは、本稿で報告した上級が一番上のレベルであり、上級修了後に日本語科目の履修を終える学習者も多かったという背景もあり、



「学習者は教師から示された言語知識や作文の型に従うのではなく、今までの学習の中で得たものを自分で組み合わせ、発展させて読解やライティング活動を行う」形で上級コースを作りたいと考えていた。こうした漠然とした「教師から自立していく」イメージが、コースデザインの更新プロセスで、明確化されていったのである。そして、コースデザインにおける[コースの理念・目標・授業内容]の整合性は、クラス担当者や学習者とのやりとり及び筆者ら二人の議論を経てボトムアップとトップダウンの双方から再構成された。

一方、「自立した言語使用」という理念は、青木（2001）の「学習者オートノミー」、TRIM 他（2004）のヨーロッパ共通参照枠における「基礎段階の言語使用者・自立した言語使用者・熟達した言語使用者」（p 23）に影響を受けている。これらの先行研究をもとに、筆者らの頭の中に構築されていた「自立」や「言語使用者」という概念が、教室現場からボトムアップで浮かび上がってきたものと結びれて言語化されたものが「自立した言語使用」という、コースの目標の「そのさきにある理念」であった。これもまた、ボトムアップとトップダウンの双方で作られたものである。

#### 4. おわりに

本稿では、教科書を用いた中上級日本語クラスにおける3学期間にわたるコースデザインの更新過程を記述・分析した。その結果から、コースデザインを行う際、[コースの理念・目標・授業内容]の整合性を明確にすることが重要であること、そして、その整合性はデザイン更新の過程で行われるクラス担当者や学習者とのやりとりを通じて、ボトムアップで検討し、規定することが可能であることを指摘した。

しかし、コースの理念と目標と評価との整合性についてはコースデザインのプロセスで十分に検討しておらず、大きな課題が残された。自立した言語使用を理念とし、その下に目標を置いてコースデザイン・シラバス作成を行った場合の評価のあり方に関しては検討の余地がある。理念・目標・活動・評価の整合性については今後の課題としたい。

（武一美 たけかずみ・早稲田大学・k.take@aoni.waseda.jp）

（小高葉子 おだかようこ・米国国務省日本語研修所・ytakahashi2004@gmail.com）

#### 注

1. 中級には「選択課題」の活動がなく、レポート等への教師関与（添削等）が多かった。
2. 「自立した言語使用」を後にコースの理念と考えるようになったが、筆者らは当時から学習者の教師からの自立を漠然と意識しており、どのコメントをどのように生かすのかはそれに沿って判断していた。

#### 参考文献

- 青木直子（2001）「日本語を学ぶ人たちのオートノミーを守るために」『日本語教育』138, 33-42.
- 宮原彬（2006）『留学生のための時代を読み解く上級日本語』スリーエーネットワーク
- TRIM, J., NORTH, B., & COSTE, D.（著）, 吉島茂・大橋理恵（訳・編）（2004）『外国語教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版